

第53回九州地区大学一般教育研究協議会議事録

<https://doi.org/10.15017/20605>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 53, 2005-01-07. 九州地区大学一般教育研究会
バージョン：
権利関係：

《発表：導入教育部会》

初年次における少人数教育の成果と課題

大分大学 市原 宏一

本学経済学部は学部教育の4年間を通じた少人数教育を特色としているが、その一環として1年次前期必修の「基礎演習」（平均15名で21クラス）を行っている。これは、高校までとは異なる学習方法に関する戸惑いを解消し、大学での勉学態度を身につけさせるための入門授業で、テーマ・内容は担当教官により異なり、例えば入門書の購読などを通じて、一般的、基礎的教養を習得することを目的としている。とりわけ近年では、経済学など社会科学分野の高校までのカリキュラムの多様性により学生間個々の学力格差が大きいため、それぞれの学生に対応した少人数教育における指導の重要性が認識されている。また同時に、情報処理など専門教育の基礎となる様々なリテラシー教育についても、就職活動や学生生活上の必要性から個々の学生に対応した指導法の必要性が痛感されている。こうした課題に対して、より効果的な教授法を検討し、導入期にふさわしい教育内容の標準化を図るため、「基礎演習」を通じて、組織的、制度的な検討と実践が行われてきている。

①教育内容の標準化

従来、教育内容は個々の教員に委ねられていたが、2001年度より、最初のほぼ一月については標準化した内容での授業を行っている。具体的には情報リテラシーと（3時間）、セクシャルハラスメント問題の理解（1時間）について教員用指導要綱と学生用資料を作成し、この内前者については複数の演習の合同授業が演習室で行われている。さらに、2004年度には、従来学年全体で行っていた新入生ガイダンス（学生生活・履修指導）を、統一した指導要綱と資料に基づきながら、基礎演習を単位として行っている。

②教育内容の集団的検討

本学では全教員が主体的に教育技法の改善をすすめることができるように大学教育開発支援センターの企画するFD活動が行われているが、この一環として、2003年度には「初年次のゼミナールにおける教育技法の改善ワークショップ」が行われた。これは、初年次の少人数教育の教育技法・内容、とりわけ、課題探求型能力の育成、リテラシー教育など専門教育との連携が必要とされる教育方法についての改善を目的としたもので、参加者はグループに分かれ、各グループで検討した授業を個々に実践するか、あるいは合同授業を行った。さらに、参加者相互のゼミナール参観を踏まえて検討会を行っている。

③今後の課題

本学部では2005年度にカリキュラム改定を行う予定であり、その際には従来から導入期教育の柱であった「基礎演習」の必修単位増加を図る（前期のみから、後期も開講）。これにともない、その内容と教授方法の改善が、学部全体の教育効果の標準化とともに本年度中の重要な検討課題となっている。この課題についての検討継続のために、「経済学部における導入期教育としての初年次少人数教育のあり方の比較検討と開発」を学長裁量経費の拠出を受けて実施している。

《発表：導入教育部会》

学生の小レポートによって展開する講義

－「水の文学誌」の場合－

熊本大学 森 正人

1. 問題の所在

教養教育における講義形式の授業は、概して受講生も多く、週に一度教室で顔を合わせるのみの教師と学生の関係は希薄のままに終わってしまう。授業は教師の一方的な説明に終始しがちで、単調に陥りやすい。教師の教育目標と学生の関心とがすれ違ってしまえば、受講生は退屈さに引き込まれ、一方教師は受講生の反応の鈍さに手応えのなさを覚え、双方のいらだちが募る。

こうした条件のもと、教養教育における講義形式の授業はどのような目標を掲げ、どのような内容と方法で行えばよいのであろうか。

私は、熊本大学で平成6（1994）年度から平成15（2003）年度まで実施されていた一般教育の教育課程（注1）のうちの「教養科目」、そのなかの「個別科目」、それがまた下位分類されているうちの「主題別授業科目（コア・カリキュラム）」を担当してきた。もう少し具体的にいえば、主題別授業科目は関連深い授業科目をコアと呼んで組織化し5つの群に編成したもので、「Ⅰ. 自然と情報」「Ⅱ. 人間と行動」「Ⅲ. 社会と歴史」「Ⅳ. 思想と文化」「Ⅴ. 環境と生活」から成り、コアⅣに属する「日本の文学」であった。

この間、受講する学生の反応を見ながら、授業内容、授業方法、テキストに変更を加え続けてきた。そして、大学設置基準のいわゆる大綱化以後、平成6年度に新しい教育課程に移ってからは、テキスト講読を中心とする授業から、テーマ別日本文学史とでも呼ぶべき授業に転換した。たとえば鬼、夢、異境など、特定の素材を選んで種々の文学作品から関連する部分を抜粋して教材とし、そのテーマをめぐる思想、宗教、文化、人間の想像力およびその表現の相を古代から近代まで、あるいは逆に近代から古代へたどるのである。この方法によると、授業を常にテーマに収斂させることができ、同時に和歌、物語、日記、説話、軍記、小説などさまざまなジャンルの文学に触れさせることができる。

しかし、授業のテーマと個別の教材との関係を的確に把握することは、大学に入学したばかりで、こうした形式の授業に慣れていない学生にとって容易なことではない。また、学期末試験の答案に接すると、講義を聴いて理解するとともに自分の頭で整理し、それを自分の言葉で記述するのは、さらに難事であるように見受けられる。論述を求めている問題に対して、箇条書きによる解答があり、はなはだしきは単語の羅列という答案さえかつてはあった。

2. 授業中の小レポート

こうした状況に鑑みて、主題別授業科目（コア・カリキュラム）の導入以後は、授業中に時間

を割いて学生に小さなレポートを書かせることを試みてきた。

小レポートは、授業終了前の10～20分を用いて、教師が当日の授業内容に関連する課題を受講生に提示し、配布した用紙に解答して提出してもらう。課題は、たとえば授業の内容をふまえて、それをさらに受講生自身の考えによって深め広げる、あるいは教師が方向性のみを示して最終的な説明を残した問題について受講生が結論を導き出す、あるいは複数の考え方があある場合、そのいずれが適切か根拠を挙げて説明する、などを求めるものである。小レポートを課する日は、授業の開始時に予告しておく。ただし、課題は授業の成り行きによって決める。授業終了間際にこうした課題を提示すべく授業を進行させるのがむずかしい場合は、授業の途中に小レポート作成の時間を設け、回収した後はさらに授業を続ける。用紙は200字詰め原稿用紙を用いるが、升目を無視して書いてよろしいと指示する。

提出された小レポートは、教師が添削し、簡単な意見や感想を書き添えて、5点満点で評価して次週の授業で返却する。この評価は、学期末の成績評価に加える。また、提出されたレポートのうちから5つ程を選んで電子入力し、受講生の所属学部や氏名は伏せてA4判1枚に印刷して配布する。選定するのは、最も多数の受講生が解答した標準的な意見の代表例、最も高い評価を与えた解答のうちから1つ、その他には個性的なもの、独創的なもの、あるいは問題をはらんでいるものなどである。教師はこれを用いて、課題について改めて趣旨説明をし、解答の傾向等について紹介するとともに、選定した解答例に解説、補足、意見を加える。15週の授業のなかで、こうした小レポートを3、4回課することになっている。(注2)

この小レポートには、いくつかの教育上の効果があることを確かめている。

第1に、小レポートを課することを予告して授業を行うと、受講生は注意を集中させて聴講する。第2に、レポートは教師の講義をなぞる以上のことを求められるわけで、受講生は教師の講義内容を整理し確認したうえで、自分の持ち合わせの知識、読書体験、問題意識とつきあわせて新しい思考へと踏み出すことができる。第3に、この小レポートによって、教師は受講生の授業理解の程度を知ることができる。期待される水準の解答がなかったり少なかったりすれば、ただちに教師は授業内容、授業水準について見直しを行わなければならない。また、受講生の関心のありかも把握されるので、教師は教材を選択して提示する参考にもできる。要するに、小レポートを介して教師と受講生との間には対話に似たものが成り立つ。第4に、学期末の試験にはこの小レポートに関連した問題を出すことも関係するであろうが、試験の答案の質が明らかに向上した。従来のように、箇条書きのような答案を見ることはない。

こうした授業法は、受講生にもおおむね肯定的に受け止められている。最終回の授業に受講生に無記名で書いてもらう意見や感想にも、それはうかがえる。たとえば、

①水の文学誌と聞いて最初はどういうものを扱うのかわかりませんでした。思っていた以上におもしろい内容でした。問題を出し、その解答を集めて良いものを配っていただけるシステムがよかったです。一つ一つ採点しながら見るのは大変かと思いますが、是非続けてほしいやり方だと思いました。半期だけでしたがありがとうございました。

②まず、授業形態がとても良かったと思う。講義内容とても興味深かったし、何より自分が考え、書いたものに何らかの注釈が入って返ってくるのは実に有意義だった。講義中で取り上げられた時はもちろんのことだが、そうでなくとも他の人の意見やそれに関する解説を聞

くことで思考の幅が広がったように思う。内容も本当に興味深く、「火などに注目して作品を読み解くとどうなるだろう」など思うことがあった。

3. 「水の文学誌」における道成寺物語

受講生が授業中に書いて提出する小レポートは、いくつか選んで印刷配布し、教師がこれに解説、補足、批評を加えることによって、教材に転換していく。こうした機能に注目することによって、小レポートをいっそう積極的に授業展開に生かすことができるのではないかと考えた。その試みを平成15年度の授業で実践したので、報告して大方の参考に資するとともに、批判を得て改善に努めたい。

授業科目名は日本の文学E、授業テーマ名は「水の文学誌」、開講は後期金曜日3時限目。授業計画の一部を抜き出せば、次の通りである。

授業の目標 水にかかわる日本文学を読み解くを通して、日本人の水に対する観念、想像力の働き、水に関する信仰や習俗を導き出すとともに、それらについての表現の特徴を明らかにする。

授業の内容 1、水の文学誌への案内
2、泉に天降る羽衣の天女－風土記
3、肥後白川の水汲む檜垣の媼－後撰和歌集・大和物語
4、東山の石井のほとりの別れ－更級日記
5、日高川を泳ぎ渡る執念の蛇体－道成寺縁起
6、夏目漱石のオフェリア幻想－草枕

キーワード 日本文学、水、和歌、物語、説話、小説

評価方法 学期末の筆記試験及び授業中に書いて提出する小レポート。

受講生は48人、1年次生が最も多くて38人、2年次生2人、3年次以上8人であった。所属学部は文学部が最も多く、21人。残りは薬学部を除く5学部から数人ずつであった。

おおむね授業計画に沿って進めたけれども、授業の内容の項目6「夏目漱石のオフェリア幻想－草枕」は行うことができなかった。授業の日に公務出張する必要があつて、授業時間が不足したことと、項目5「日高川を泳ぎ渡る執念の蛇体－道成寺縁起」に、予定していた以上の時間を割いたことによる。

項目5については、教材として次のように資料4と番号を付してA5判2枚のプリント（ただし原文は縦書き）を配布し、教室で受講生に見せるために道成寺縁起絵巻のカラー写真の載る本を用意した。

水の文学誌（資料4） 日高川を泳ぎ渡る執念の蛇体－道成寺縁起

I 〈道成寺〉物語の主要資料と概要

- ①本朝法華経験記巻下第一二九 ②今昔物語集巻第一四第三 ③探要法花験記巻下第四二 ④元亨釈書巻第一九・釈安珍 ⑤道成寺縁起絵巻 ⑥賢学の草子 ⑦日高川の草子 ⑧道成寺物語 ⑨能「鐘巻」「道成寺」 ⑩山伏神楽「金巻」

本朝法華驗記 [] 内は今昔物語集

- ①熊野参詣の山伏、宿の女に恋慕される。山伏は下向のおりに寄ると約束する。
- ②その日を心待ちにしていた女、道行く人より、かの山伏はすでに下山して通り過ぎたことを聞く。
- ③女は離れ家に入り大毒蛇となる。〔大ニ^{いかり}嘖テ家ニ返テ^{ねや}寝屋ニ籠居ヌ、音セズシテ暫ク有テ、即チ死ヌ。〕家から出てきた毒蛇は山伏を追いかける。
- ④山伏は道成寺に逃げ込み、下ろした鐘の中に隠れる。
- ⑤蛇は鐘に巻きつき尾で龍頭を叩く。山伏は鐘もろとも焼き殺される。蛇は去る。
- ⑥道成寺の老僧の夢に、大蛇が現れ、「〔其ノ毒蛇ノ為ニ被^{りやうぜられ}領テ、我レ、其ノ夫ト成レリ。〕法華經を書写し供養してほしい」と訴える。
- ⑦老僧が、諸僧とともに法華經を書写供養すると、善根によって、二蛇は天に生まれたと夢告があった。

II 仏教的龍蛇観

(省略)

III 道成寺縁起絵巻

- ①其のときぬを脱ぎ捨てて大毒蛇と也て此の河をば渡りにけり。

(省略)

道成寺縁起は、こう呼ぶよりは安珍清姫の物語といったほうが通りのよい、数十年前までは広く知られていた物語である。女に言い寄られた美男の僧が、後日の逢瀬を約束しながら、それを守らなかったために、女は蛇になって僧を追いかけて、紀州道成寺の釣鐘の中に隠れた僧を煩惱の火によって焼き殺してしまうというストーリーである。今からおよそ千年前の文献に載り、表現の媒体を変え、宗教的、文化的背景を変えつつ改作され、現代まで継承されてきている。そのため、日本文学研究の分野を中心に相当の研究の積み重ねられてきている。(注3)

講義は、まず「水の文学誌(資料4)」のIに基づき、道成寺物語が平安時代から近代に到るまで仏教書、絵巻、草子、演劇などさまざまな媒体によって表現され、伝承されてきたことを概観し、最も古い本朝法華驗記を中心に梗概を示した。これが、愛欲のために蛇道に堕ちた者を法華經の靈験によって救済する物語として語られていることに注意を向け、IIによって、仏教では蛇や龍が罪障の象徴とされていることを、法華經、往生要集、今昔物語集巻第一四第四によって示した。

続いて、IIIに道成寺縁起絵巻の詞章を掲げ、特にこのテキストでは、僧を追いかける女が家の中でなく川のほとりか川の中で大蛇となって泳ぎ渡ったと記述されていることに注目させた。こうした語りかたはIに示した⑥賢学の草子、⑦日高川の草子と同様であることを、「水の文学誌(資料4)」IVをもって指摘したうえで、道成寺縁起絵巻の絵では、僧を追いかけて道を走る女が次第に大蛇に変じていく、その変身の過程を数段階にわたって描いていくことを確認し、その意図についても説明を加えた。

「水の文学誌(資料4)」Vには能「鐘巻」の詞章の一部を掲げ、これを改作した能「道成寺」とあわせて紹介した。二つの能は道成寺縁起の後日譚で、かつて大蛇になって僧を鐘もろとも焼

き殺して悪道に堕ち、法華經の力によって救済されたはずの女が、白拍子となって道成寺の鐘供養の場にやって来る、隙をついて鐘の中に飛びこみ蛇に変身してふたたび出現するというものである。能「鐘巻」「道成寺」については、鐘の中で蛇への変身が行われていることに注目し、道成寺の物語は後日譚とも蛇への変身が繰り返される場所に大きな特徴があることを強調した。

4. 小レポートの配布と追加教材

以上の内容を2週にわたって講義したうえで、受講生に次のような課題を示して小レポートの作成を指示した。

鐘の中と離れ家とが変身の場となるのはなぜか。川の水が変身を促すのはなぜか。

説明の時間が十分に取れなかったこと、課題がやや抽象的でしかも問題が多岐にわたることから、小レポートの作成には相当難渋している様子が見えた。しかし、そのためにまことに多様な解釈が見られた。次の週には、受講生のレポートから抜粋して次のようなプリントを作成して授業で配布した。

水の文学誌（資料 番外3）

鐘の中と離れ屋とが変身の場となるのはなぜか。川の水が変身を促すのはなぜか。

① 鐘の中と離れ家。これらは、どちらも閉鎖的空間である。暗く、狭く、湿り、明るいものや美しいものとは対極をなす。このような空間において、女のどろどろと黒い欲望や醜さがこごり、蛇という形を為していくのである。外からはその誕生と形成を明確に知ることはできず、これは邪悪なものが身に宿るのは意識的でない、ということも暗示する。この二つの場所、つまり闇において邪悪が形となった蛇はまさに仏教的龍蛇観に基づくものである。いわばヒトの醜さの結晶であり、ヒトでないにも関わらず極めて人間臭さを感じさせる。

対して、川の中での蛇への変身には、あまり邪悪さや醜さが感じられない。汚れを落とす流れと悪のイメージが結びつかないのだ。その為に絵巻では道中における変身が描かれているのではないだろうか。その方が、より当時のイメージであった邪悪の化身としての蛇を強調できるから。（下略）

② 人面蛇身、蛇身の男女といった事柄に、私はまず女媧と伏羲を連想した。蛇や龍蛇という存在には罪だけでなく、人を超えた神的なイメージも付随しているのではないかと思う。そこで私は、変身とはすなわち「超的存在の誕生」と捉えられないかと考えた。誕生であれば離れ屋（寝屋）が変身の場となる事も納得がいくのではないだろうか。誕生、出産のイメージが寝屋にたどりつくのは容易い。鐘も、閉鎖された暗い空間でありどこか胎内を象徴しているように思われるし、水は羊水につながる。そもそも水は、生命に必要不可欠なものであるし、蛇は水中を泳ぐので結びつきやすかったということもあるだろうが、私はこのように寝屋、鐘、水はどこか母胎のイメージでつながっているように思えたし、そこには母性のもつ「呑みこんでしまう」性質があるように思えた。

◎ (上略) 私は人間が蛇に変身するのは悪いことだとは思わない。なぜなら人間のままだと執心に苦しむが、蛇になったら理性も失い思い悩むこともなくなるだろうと思うからだ。水は人間の苦しさを洗い流して蛇に変身させる力を持つと考える。

① 鐘の中や離れ屋などの閉じられた空間が変身の間となる理由は、「変身」といえば隠れてするものというイメージがあるというのが一つだと思う。鶴の恩返しにおける変身を密室で起こるように。もう一つ私が思うのは、閉じられた空間が、「卵」のイメージなのではないかということだ。卵の中に入り、新たな別の生き物として生まれ変わるという意味があるのではないかと思う。

水が変身を促す理由は、水が生命の源であり、再生の間というイメージがあるからだと思う。「水」と「閉じられた空間」にはこの「生まれ変わり」「再生」のイメージが共通している。

それぞれに若干の解説を加えるとともに、これらの意見は一見対立しているように見えるけれども、解釈の水準の相違にほかならないこと、蛇への変身という要素が、異なる文化的宗教的文脈のなかに置かれると、意味を変えてしまうと説明した。そして、意味を変え続けることによって、物語は千年にもわたって命脈を保つことができるのであり、また長く伝承される物語は大きな謎をはらんでいて、それが人間のありかたに対して深く問いかけてくるために、人はそうした物語を忘れることができないのであると説いた。

ただし、こうした考え方は受講生の理解しやすいものではない。そこで、次のような教材を追加して配布し、論旨の補強を行うとともに、問題を広げ深めることとした。

水の文学誌 (資料5) 道成寺説話に関する補足

①天橋も 長くもがも 高橋も 高くもがも 月読の 持てるをち水 い取り来て 君
に奉りて をち得てしかも (万葉集巻第一三 三二四五)

② (省略)

③那の流れは甚麼病にでもよく利きます。私が苦勞をいたしまして骨と皮ばかりに体が
朽れましても、半日彼処につかつて居りますと、水々しくなるのでございますよ。

(泉鏡花「高野聖」)

④天の安の川を中に置いて、うけふ時に天照大神、先づ建速須佐之男命の佩ける十拳の
劍を乞ひ度して、…狭霧に成れる神の御名は多紀理毘売の命。 (古事記 上巻)

⑤日にち積もりてみてあれば、四百四十四か日と申すには、熊野本宮湯の峰にお入りあ
る。なにか愛洲の湯のことなれば、一七日お入りあれば、耳が聞こえ、三七日お入り
あれば、はや物をお申しあるが、以上七七日と申すには、六尺二分、豊かなる元の小
栗殿とおなりある。 (説教「をぐり」)

⑥その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光
りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてみたり。(竹取物語)

⑦昔採竹翁ト云者アリケリ。女ヲ嬾奕姫ト云。翁ガ宅ノ竹林ニ、鶯ノ卵女形ニカヘリ

テ巢ノ中ニアリ。翁養テ子トセリ。

(海道記)

⑧ (省略)

小レポートの④の意見は、鐘の中と離れ家とがともに閉ざされた空間であることに注意を向け、そこで人が蛇になることの意味を読み解いている。龍蛇を邪悪で罪深い存在とする仏教的な考え方が具現されていることを、自分の感性や思考を通して自分の言葉で記述し直している。ただし、この受講生は、それと対照的な川における変身については問題の入口にとどまっている。

これに対して、③の意見は④と鋭く対立している。現代人にも理解しやすい仏教的蛇観を覆し、人間中心の世界解釈をみごとに相対化してみせた。なお、「苦しさを洗い流す」水の力に言及しているのは、これまでの授業のなかで、罪や汚れや災いを洗い流す水の霊妙な働きについて教師が繰り返し言及してきたことを受けたものである。

⑧の筆者は相当な読書家であるらしい。離れ家と鐘の中と水と、3つの変身の場を統一的に説明してみせた。教師のねらいがどこにあるかを十分に推し量って解答を記述している。教師は中国神話とユング心理学について補足的説明を加えるとともに、こうした考え方を補強する資料として、「水の文学誌 (資料5)」の①②③を示して、川の水が、再生変身を促す力を持つと信じられていたことを示した。また、④によって川が神々の聖婚と誕生の場であることを説き、⑤によって温泉もまた再生の場であることを指摘した。(注4)

また、学生の小レポート⑧に関して、閉じられた狭い空間を通して再生誕生が行われることを、⑥竹取物語のかぐや姫の出現の場面で示し、これが後世の資料⑦では卵生説話として語られていることに注意を向け、聖なるものはこうした小さな中空の器を通して誕生するという物語の基本型のあることを論じた。

5. 残された課題

このように、受講生の小レポートを受けて、教師が資料を追加しつつ講義を進める方法は、単に講義における説明の不足を補うのではなく、受講生の質問に答えるのではなく、受講生と問題意識を共有しながら講義を動的に展開させていくという点で、一方通行に陥りがちな講義形式の不備を補うことができる。また、たとえば学生による教員の授業評価の際に、授業計画通りの授業であったかどうかという観点の設定されていることが多いけれども、通常教師は学生の関心や達成状況を見ながら授業の水準や内容や方法を変えるし、また変えなければならない。この試みは、それをシステム化したもので、それによって対面授業の特徴を活かした、いわば授業に血を通わせる方法の一つであるといえよう。

ただし、実践の中ではいくつかの課題も見えている。

このような授業を行って、学期末の試験では、2問のうちの1問に「道成寺説話における変身の意味するものについて論述せよ」と出題した。これは、[1] 女の蛇への変身 (離れ家あるいは川において)、[2] 僧の鐘の中での死を経て蛇への転生、[3] 後日譚における白拍子の鐘の中での変身と、3段階4種の変身が行われていること、その全体のを視野に収めて論述することを求めている。受講生の多くが、小レポート及び追加教材による授業をふまえて解答しようとしていた。また、その授業と自分の問題意識と結びつけて問題を深めようとする解答も見受けられ

た。しかしながら、3段階4種の変身を視野に入れて、しかも変身の重層的な意味を析出している答案はさほど多くなく、どちらかといえば、受講生がそれぞれ説話から読みとった最も気がかりな問題が記述されていた。

このことは、教師によるレポートの扱いに対する受講生のさまざまな反応とも関係する。小レポートは1～5点で評価を行うが、どのようなレポートが高い評価を得るのか、わからない、ある年度の受講生の言葉を借りれば、「授業中に出されるレポートの正しい解釈の仕方というのがいつも理解できなかつた」と感じている受講生が少なくないということである。

この感想は、自分の読みを大切に思う余り、別の対立的な読み、かけ離れた読みと関わらせながら相対化することがいかにむずかしいかを物語っている。そして、第2節にあげた受講生の感想④にあったように、授業で紹介するのは「解答を集めて良いものを配って」というと誤解されかねないことと表裏の関係にある。たしかに教師は高い評価を与えた答案を多く紹介するにはするけれども、実は3点の評価しかしなかつた答案も取り上げているのである。正しい一つの読み、そうでなくとも理想的な読みがあるという考えに立つ受講生には、不安や混乱を引き起こすのであろう。平成15年度の感想の一つに次のようなものがあつた。

◎文脈の中で読み取る作業で想像力が養われた点はよかつた。ただ、フォローアップに関して、数人の意見の評価にとどまらず、一つの明確な指針となる意見形成がもつとあつてもよかつたのではないかと思う。また、せつかく様々な文献をあたつたのだから、それらの文献に共通した水に対する昔の日本人の考えを全体的にまとめとしてほしかつた。

いかに読むかだけでなく、その読みがどこからどこから導かれるのか、その読みが何に支えられるのか、という問いを立てることは卒業論文を書く程の学生にもむずかしい。教養教育の到達目標としては、

④ (略) 授業終了時に出すレポートは、最初はどう書けばいいのか分からないものばかりだつたのも、真剣に考えるとこれも意外に楽しいものでした。考えることが多い授業だつたと思います。

とか、第2節に示した④の「他の人の意見やそれに関する解説を聞くことで思考の幅が広がつたように思う」という感想を引き出せば十分というべきであろうか。

【注】

- (1) この教育課程は、平成15年度をもって廃止され、新たに平成16年度から「21世紀熊本大学教養教育プログラム」と呼ばれる教育課程を実施に移したところである。
- (2) この授業法については、森正人「授業中の小レポートを利用した教養教育―「日本の文学」の場合―」(『国語国文学研究』第39号 2004年3月)に、平成14年度までの数年間の試みの大概を報告した。
- (3) 私もかつて2編の論文を書いたことがあり、この時は「道成寺遡源」(『観世』第52巻第8号 1985年8月)に論じた内容の一部を中心に据えて講義を行った。
- (4) 説教「をぐり」は、死んで餓鬼道に堕ちた小栗判官が熊野の湯でよみがえる物語である。現在の湯の峰温泉に小栗の入つたと伝えられる壺湯という場があつて、明らかに母胎のイメージである。

日本文理大学の導入教育改革

日本文理大学 脇田 淳一

1. はじめに

日本文理大学では平成15年度より導入教育の改革に着手した。入学してくる学生の学習履歴の多様性と学力のバラツキの大きさを考えると、従来の大学の一般教育の意味をもう一度問い直す必要があると思われたのと、専門課程への橋渡しとしての導入教育の役割は依然として強いものがあることを鑑みると今までにない新しい教育体系が必要であったことがその理由である。日本文理大学の教育課程は一般教養科目、総合基礎科目、専門教育科目の3分類からなるが、その内総合基礎科目の中に導入教育に相応しいいくつかの科目をベーシック科目として打ち立て、習熟度別授業を行うとともに、これらの授業を補完するものとして基礎学力支援センターを創設するなどいくつかの工夫を凝らしたのが本改革の骨子である。1年半が経ち、様々な問題点が浮かび上がり、更なる改革の必要性を痛感しているが、本報告では改革の現状を詳説する。

2. 導入教育改革の理念

(1) 基礎学力の育成

「基礎学力なくして専門教育・研究の達成はない」との基本的な考え方から、数学・物理・国語・英語・情報の5科目をベーシック教育科目と名付け、統一したシラバスの下に少人数・複数クラスの徹底した基礎学力向上教育を行うことにした。学習範囲は大雑把には高校までの範囲で、この学習を通して学習履歴の多様性と学力のバラツキをできるだけ吸収して、ある一定の水準以上のレベルにまで押し上げるのが目的である。その一方で、これとは別に、基礎特別講座というテーマ制の科目を設け、ゼミ形式の勉学の楽しさを追求することを基本目的とした科目も新設した。この様にいわば硬軟取り混ぜた教育を1年次に行うことで大学の勉学にスムーズに入っていける様工夫した。

(2) 理解優先

ベーシック教育の基本的な考え方は、「理解優先」である。従来の様に、決められたシラバス通り何がなんでも15回の講義を押し通すという「何を教えたか」という教育から、実質を厳しく問うて、学生に「何を理解させたか」を重視する教育へと変更した。いわば先を急がない教育であり、必要ならば立ち止まる教育であると言える。そのために「習熟度別少人数教育」と授業を補完する「基礎学力支援センターでの補習」を両輪として、さらに詳細は後述する「フレキシブルなシラバス」を採用した教育を行うことにした。

(3) 勉学の楽しさの追求

1年次からベーシック教育の様にいわば「厳しい」教育だけでは学生に酷ではないかとの考えから、もう少し緩やかな環境で学生が好きなことを学習できる、準ゼミ形式のテーマ別授業を行う「基礎特別講座」を開設した。この科目は学生の勉学意欲向上を第1の狙いとするが、その一

方で教員に対してはいわば一種の「実験授業」の意味合いを持たせている。テーマは担当する教員が自由に決められるが、教育内容や方法についてはこの科目の趣旨に沿った工夫をすることが教員には求められる。そういう意味で実験授業だというのである。この科目で従来と変わらぬ授業をしたのでは意味がないわけで、教員一人一人が日頃考えている様々な教育上の工夫を盛り込んで、学生の反応や理解状況を適切に把握しながら教育技術を向上して欲しいという期待を持たせている。

(4) ベーシック教育を支える補助システム

ベーシック教育が十二分にその効果を発揮する様にいくつかの補助システムを考えている。それらは「事前学習」、「(クラス分けのための) 学力診断」、「春、夏トレーニング」、「独自教材の作成と公開」である。これらは入学時にスムーズに勉学に取り組みさせてそれを継続させることを狙いとする。

以上に述べた導入教育の全体フローを図1 に示しておく。

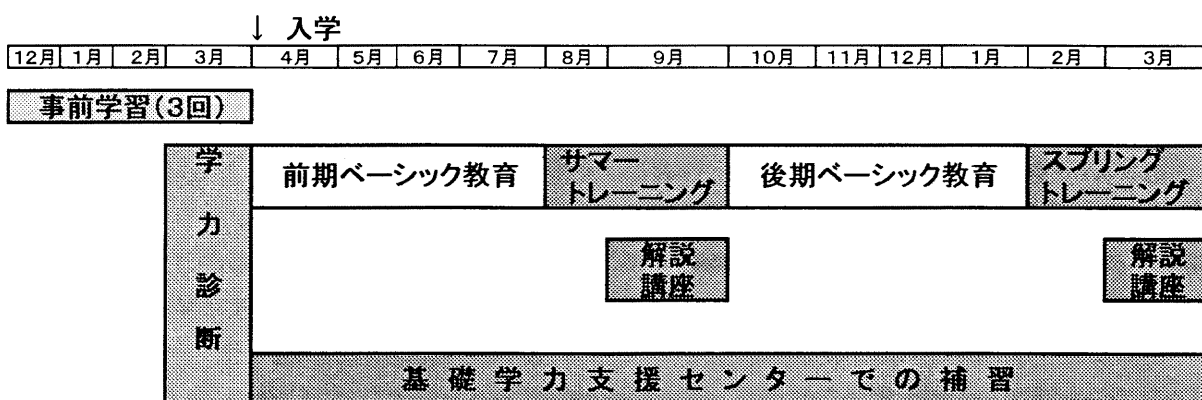


図1 導入教育フロー

3. 導入教育の内容

(1) 事前学習

「事前学習」の目的は、第1 に合格から入学までの学習の継続であり、第2 に専門課程の事前体験である。毎年入学前の12月から3月の間で合計3回行う。内容は数学、英語、国語、情報という基礎科目の演習と、専門学科独自の課題から構成される。学科独自の課題には例えば、読書感想文、最近の環境問題に関する新聞記事に対する感想文、簡単な人工物のデッサン、あるいは思い出マップの作成というものもある。これらの課題は添削して返却している。

(2) 春・夏トレーニング

数学、物理、国語、英語、情報の5科目について問題小冊子を作成し、休暇前に各自に配布し休暇中の学習の継続を促すことを目的に実施している。また、9月、3月に約1週間の解説講座を設け、学生の疑問に答えることにしている。さらに提出された問題小冊子は添削して返却する。

(3) ベーシック教育

① 総論

対象は、数学、物理、国語、英語、情報の5科目である。共通の特徴は、まず第1 に「習熟度別少人数教育」である。入学時の学力診断と学習履歴調査、さらに各人の希望でクラス分け

を行う。第2は授業と「基礎学力支援センターでの補習」の両輪による理解度向上であり、第3はフレキシブルな統一シラバスによる授業で、無理がなく、かつ、効果が十分期待できる教育を目指している。

以下、各科目の内容を示す。

②数学

数学リテラシーⅠ、Ⅱが通期計30回授業で、主に関数を中心に高校の復習をする。さらに微分積分A、B、線形代数A、Bも同様にそれぞれ通期で30回授業が組まれている。これらの分量の数学を機械・電気系と航空宇宙系は1年間で履修、環境・情報系は2年間で履修することになっている。数学のシラバスは典型的なフレキシブルなシラバスとなっている。フレキシブルという意味は、学習項目を必須項目と選択項目に分類し、必須項目はどのクラスも共通に学ぶが、選択項目はクラスのレベルにより必要により取捨選択することが可能であるという意味である。習熟度の高いクラスはこの選択項目を多数学び、習熟度が低いクラスは少なくなり、極端な場合は必須項目だけで終了しても良い。小テスト等で学生の理解度を確認しつつ、必要ならば立ち止まれる様にと配慮がなされている。また学力診断結果を参考にしてクラスによってスタート地点が異なってもかまわないというシステムでもある。

③物理

高校の範囲の力学に限定し、週2回通期で計60回の授業が用意されている。数学同様のフレキシブルなシラバスを採用する。この物理には特別の目的が課されている。それは一言で言えば「工学基礎」の試みである。工学の基礎として物理は大変重要な位置にあるが、最近の学生はこの科目を避けて入学してくる者が多い。もちろんしっかり物理ⅠB、物理Ⅱを学んでいる者も少数ながらいる。数学同様、学力のバラツキが激しい科目の筆頭といえる。そういう学生達に、工学の基礎として自然現象の数式表現（微分形式の表現）に慣れてもらいたいという観点から、特に授業量を多く構え、力学を題材に工学部の学生全員に取り組みせることにした。この趣旨を生かすためには数学の知識が欠かせない。数学を十分学んでからという意見もあったが、敢えて1年次に数学と並行して学ぶ様なシステムにした。よって物理という科目であるが必要最低限の数学、例えば微分積分や微分方程式の極く基本的な所は、本来の数学の授業の進行を待たずこの物理の中で教えてしまう。そのための60回という授業量と考えることができる。そういう意味では、この物理教育は一種の実験でもある。100%の確信を持って設計した授業ではない。しかし「工学基礎」というコンセプトは大変重要である。将来はもう少し別の姿に変貌していくであろうが、このコンセプトは生きていくであろうし、これが発展して将来の工学部の導入教育が形成されていくのは間違いないと信じている。

④国語

導入教育としての国語は一種独特の意義を持つと考える。文学ではなく国語教育なのであるが、そう言っただけでも限らない議論が巻き起こる可能性がある。それ程国語教育というのは大変多様な内容を持つ。人により考えが全く異なる。授業設計が大変困難な科目である。本改革においては2つの柱を立てた。1つは「大学での勉学の基礎となる国語力の養成」であり、高校までの学習内容を新しい観点から学習するもので、国語の3要素「読み方、書き方、話し方」を「書き方、話し方」から始めて「読み方」へ段々移行していく方法をとった。一言でいうならば「書き方」重視であり、文章がしっかり書けるようになることをまず目指す。そのための語彙や文の構成等をしっかり学ぶ。これはある意味では将来の就職活動で自分を明確に文章で表現できる

様という期待を込めている。もう1つは「自分探し」の視点の導入であり、これも就職を念頭に置いており、自分の進路を1年次から考えさせるという指導を国語の中に含ませている。具体的には授業で使う教材の問題でもある。この問題を考えさせる良い教材を毎回学生に読ませ考えさせるというを行っている。国語の授業は年間30回行っているが、その内15回でこの「自分探し」を取り扱う事になっている。しかし私見ではあるが、最も大切な国語教育としてはこれでは足りない。何らかの形で少なくとも3年間発展継続させられないかと模索中である。

⑤英語

「大学の専門課程の学習や将来の就職に必要な英語」の学習がまず第1の目標である。そのために「英語を読む力、聴く力」を重視する。基礎文法、基礎単語の学習から始め、段々と「IT英語」「会話」「文章理解」へと進んでいく道が用意されており、学生は3年次まで英語学習を継続できる。その一方で、英語の苦手な学生には「基礎」コースも用意されており、これも3年間学習できる。

⑥情報

情報リテラシーⅠ、Ⅱ、計30回の授業を1年間で学ぶ。「社会人として必要なコンピュータの操作能力の向上」として、インターネット検索、文書作成、表計算を、また、「コンピュータを用いたコミュニケーション能力の向上」のため、E-Mail、プレゼンテーション、ホームページ作成技術を学ぶ。この科目も結構学生により習熟度が異なるのでフレキシブルなシラバスを用意している。

(4)基礎学力支援センター

以上述べたベーシック教育に対して、これを支援するシステムとして「基礎学力支援センター」を開設した。あくまでも授業を補完する補習を受け持つ場所であり、意欲ある学生と教員が改めて向き合う場所でもある。よってこのセンターの利用者は、まず第1に授業の補習希望者であり、第2に課題を抱えてセンターに飛び込んで来た学生であり、第3に自習希望者である。第2の学生は、単発で終わる場合もあるが、むしろテーマを持って教員を固定して長期に継続的にセンターを利用している場合が多い。教員側の態勢としては、ベーシック科目担当の全教員と一部の専門科目担当教員がこの任に当たっている。一週間を通じて原則4、5限が補習タイムであり、授業は1～3限に集中するシステムとしている。教室での授業とは異なるので、1回の補習に参加できる学生は極く少数に限定している。そのためセンターには、3～4人コーナーが2箇所、8～10人コーナーが1箇所、自習コーナー1箇所、そしてパソコンコーナーが1箇所ある。写真1に基礎学力支援センターのレイアウトと利用風景を示す。

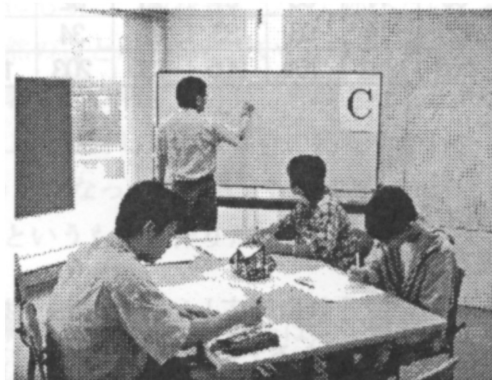


写真1 基礎学力支援センターの風景

4. 導入教育の結果

導入教育を開始して 1年半しかたたず、十分な結果が把握できているとは言えないが、以下では、ベーシック教育に対する学生の評価・声と基礎学力支援センターの利用状況について述べる。

(1) ベーシック教育に対する学生の評価・声

1年間の教育が終了した平成16年 1月に学生に対してのアンケート調査を実施した。その結果、ベーシック授業が良かったと答えた者が全体の64%、良くなかった者が4%、どちらとも言えない者が32%であった。一方、習熟度別のクラス編成に対しては、良いと答えた者が60%、良くない者が4%、どちらでもない者が36%であった。概ね60%の学生が評価していることでひとまず改革は順調な船出をしたと言えると思う。さて次にこれらの学生の生の声を以下に示してみたい。

[ベーシック教育が良かった理由]

- ・工業の出身なので普通科との溝を埋められた。
- ・高校の時物理の授業を受けてないので、物理が勉強できて良かった。
- ・社会に出る上で役に立つことを教えてもらえた（英語、国語、情報）。
- ・学力が上がったと思う。

[ベーシック教育が良くなかった理由]

- ・必要ない。わかっている。
- ・得たものが少なかった。

[ベーシック教育が良くも悪くもどちらでもない理由]

- ・本当に将来役に立つのかがわからない。
- ・文系科目が易しすぎるのに対し、理系科目が難しすぎた。
- ・必要な科目もあったが、やらなくても良い科目もあった。

(2) 基礎学力支援センターの利用実績

平成15年度の利用実績を表1、図2に示す。表1の人数はセンターで90分以上の学習をした者のみカウントしており、これより短い時間の利用者も含めると更に人数は多くなる。科目では数学と物理が多いのと、期末試験前の利用が多くなる状況が良くわかる。なお、夏休みや春休みにも利用者が結構いること、また、4年生は主に就職試験対策であることを付け加えておく。

表 1 基礎学力支援センター利用実績

	数学	物理	英語	国語	情報	その他	自習	計
1年次生	249	226	66	104	93	98	97	933
2年次生	119	1	2	7	1	39	7	176
3年次生	69	11	33	61	21	32	45	272
4年次生	121	14	63	33	15	34	8	288
計	558	252	164	205	130	203	157	1669

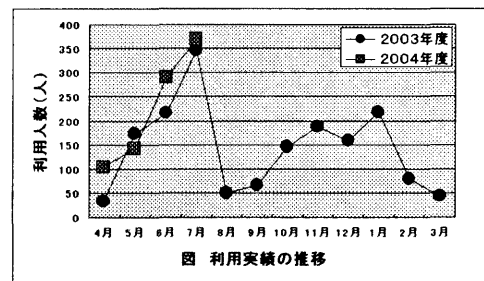


図 2 利用実績の推移

5. 今後の課題

(1) 授業方法の改革

導入教育にはそれに相応しい授業方法があるはずである。旧態依然の90分一方通行の講義形式はもはや有効性があるとは考えられない。この方式は教員の自己満足に過ぎないと言っても過言ではない。その様な観点から改善を行うとしたら、まずは「双方向授業による細かな理解度チ

ェック」がキーワードになるのではないかと思う。そして細かな理解度チェックを入れたら、必然的に補習の必要性が浮かび上がると思うのである。またこれは導入教育だけでなく、専門教育全般にも言えることである。双方向授業は一部開始してはいるが、まだ全面的なものとはなっておらず試行錯誤の段階と言える。授業内容や方法論、更には教材（教科書）も含め改善すべき点は多いと思っている。

(2) 習熟度別クラス教育についての議論の深化

学生の評価は良いのであるが、教育界全体での習熟度別教育に対する評価は様々なものがある。教育学者の意見の中には、この方式は欧米ではとっくの昔に、問題が多だけでなく効果がないとの評価が下った過去の遺物であり、この方式に拘るのは日本を含むアジア諸国だけであるとの強烈なものもある。その学者の意見では、習熟度別クラスの唯一の効果はいわゆる特進クラスだけだということもありそれは理解できる。前述のアンケートでもわかる様に、本学でも成績の良い学生が現在の導入教育に対し否定的な見解を示していることも事実であり、特進クラスで彼らの要請に応える動きも現実にある。この問題については更に議論を深化させる必要があると感じている。

(3) 専門課程への橋渡しのための協働

冒頭でも述べた通り、導入教育の目的の一つに専門教育への橋渡しの役目がある。しかし、今回の改革で導入した教育内容だけでは正直言って十分ではない。私見ではあるが、前述した工学基礎というコンセプトを拡張して専門基礎教育という教育「過程」(?)を間に挟んで専門教育に繋げていくのが良いのではないかと思う。必然的に現在の専門課程を組み替えて、純粋な専門科目は極く少数にして、本格的な専門教育は大学院で行い、学部教育は基礎的な教育に重点を置くことになるが、この方式は最近の文科省の大学院重視の方針にも沿うものではないだろうかと思うのである。そのためにはベーシック教育担当教員と専門教育担当教員の協働が必須である。この導入教育改革を手始めとして全学の教育改革へと発展させていきたい。

(4) その他

基礎学力支援センターの利用形態の内、現在は補習が主体となっているが、学習の本来の姿は自習であると思う。それゆえこれも私見ではあるが、将来は自習の学生数を増やしたい。そのためには広い自習室をセンターに設ける必要がある。授業では様々な課題が出され、4, 5 限になると学生はそれを抱えてセンターに集まってきて自然と議論の輪ができる。そしていつの間にか教員がその議論の輪の中に入っている。教員はあくまでもサポートであり、主体はあくまでも学生自身で、自ら考え、議論して結論を出していく形の学習スタイルができてきたら今回の導入教育も本物になるのではないかと考えている。最後にもう一つ教科書について述べたい。導入教育用の教科書はなかなか良いものがない。これは当然のことかも知れないが、最も良い教科書は教育の当事者である教員が自ら作成するしかない。教育への熱意や自負、理解させるための血の滲む様な努力や汗の跡、あるいはそのプロセスの途上で獲得した教員各自の創見すなわちオリジナリティというものは、最後は教材（教科書）という形になって現れる（そしてそれが唯一残る）という気がしてならない。是非、文理大オリジナルというものを作りたいと思っている。

6. おわりに

導入教育改革は教育改革の始まりであって決して終わりではない。改革は品質管理の言葉で言えばPDCAを廻し続けることが必要で、継続の強い意思を褪せさせてはならない。今回の導入教育改革を手始めに、更により良い教育体系を築き上げていきたい。

《発表：導入教育部会》

インターネット時代の初等教育について

九州産業大学 梅野 高司

1. Introduction

1-1 学校教育の情報化 - 政府の計画

- (1) 2001年度までに全学校施設(約4万校のすべての公立小中高等学校等)へのインターネット接続 - ほぼ達成
- (2) 2005年度までに全公立学校の高速度インターネット常時接続, 全教室のインターネット接続, すべての授業でのコンピュータ活用を目標

このように情報のインフラ機器整備は着々と進められている。

1-2 インターネット白書 2004 (インプレス)

- (1) 全教員へのアドレス付与は1割程度
- (2) 小中学校のWebページ開設は54%程度, 小学校のWebページの更新回数は7割が年間7回以内
- (3) 2004年2月時点の日本のインターネット人口は, 6,284万4,000人, 世帯普及率は52.1%, 内ブロードバンドは48.1%

1-3 問題点

- (1) ブロードバンド時代に児童に対しインターネットの膨大な情報が無秩序に流入されている。これを正しく読み取るための教育(メディアリテラシー)を学校が行っているか?
- (2) そのための教員の情報活用能力は十分か?

2. 「生きる力」の育成 - 文部科学省

2-1 「生きる力」とは

— 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」(中教審答申 1996年)—

- (1) いかにか社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- (2) 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性
- (3) たくましく生きるための健康や体力

2-2 「生きる力」と情報教育

--- 「情報教育の実践と学校教育の情報化」(文部科学省 2002 年)---

- (1) 情報教育の目的は、「情報活用能力」の育成を通じて、子どもたちが生涯を通して、社会のさまざまな変化に主体的に対応できるための基礎・基本の習得を目指しており、このことは「生きる力」の重要な要素である。
- (2) 情報教育において情報モラル等を扱うことによって育成する「情報社会に参画する態度」は、「豊かな人間性」の部分に密接に関係しており、「生きる力」の育成の上でも、情報教育が非常に重要な役割を担っている。

3. 川端裕志氏の研究

「児童と現職教員の情報活用能力に関する研究」

大津市立田上小学校教諭, 滋賀大学大学院教育学研究科修士論文(2003)

- (1) 教員の自らの情報活用能力を獲得するための普段の努力と学校 Web ページ上で情報を発信する経験を積むことが児童の情報活用能力を育成するために重要である。
- (2) 児童が学校 Web ページ上で情報を発信することが児童自身の情報活用能力に影響を及ぼす。

これらのことを学校教育現場で調査し、数量的分析(因子分析法)によって、検証した。ここで、児童用情報活用能力測定尺度、並びに教員用情報活用能力尺度を作成することによって、分析がなされた。児童の情報活用能力を高める上で、学校 Web ページによる情報発信の重要性が示されたといえる。

4. 学校図書館と情報教育

--- 西田治氏(東淀川高等学校教諭)の Web ページ ---

4-1 学校図書館法の改正

- (1) 平成 15 年度より、全国の 12 学級以上の小・中・高等学校に司書教諭を配置することが義務づけられた。

- (2) これは新しい学力観(「自ら学ぶ力」や「情報活用能力」などの「生きる力」をはぐくむこと)による

4-2 司書教諭の役割

「情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて」

調査研究協力者会議(文部科学省, 1998年)

学校図書館が学校の情報化の中核的機能を担っていく必要があることから、今後、司書教諭には、読書指導の充実とあわせ学校における情報教育推進の一翼を担うメディア専門職としての役割を果たしていくことが求められる。

5. まとめ

- (1) 情報活用能力は「生きる力」の重要な要素である。
- (2) 教員と児童の学校 Web ページへの情報発信は児童の情報活用能力の育成に重要である。
- (3) 情報検索のナビゲーターとしての司書教諭の役割は大きい。

今、全国の児童にはインターネットの情報が無政府状態で流入している。学校はその中から児童に「生きる力」をはぐくむ情報を取り出す能力—情報活用能力を高める指導をしなければならない。学校 Web ページの活用はそのために重要な効果を生むと思われる。

6. 九州地区の公立小学校の Web ページ

— i-learn.jp の調査から —

1em i-learn.jp には全国公立小学校(23,633校)のうち、13,156校の Web ページが登録されており、その中から例年、J-KIDS 大賞(小学校ホームページ大賞)校が選ばれている。

県名	登録校数	更新頻度大
福岡	512	32
佐賀	143	16
大分	110	12
長崎	151	60
熊本	184	8
宮崎	120	20
鹿児島	253	19
沖縄	97	10
合計	1510	177

7. 提案

小学校、教育委員会、大学は連携して児童と教員の情報活用能力を高め、学校 Web ページによる活発な情報発信を進める必要があると思われる。

『情報教育の実践と学校教育の情報化』（文部科学省 2002 年）

第6章 学校と情報化 第5節 学校の情報化を支援する体制

2. ボランティアとの連携

・・・特に、大学等においては、授業科目においてボランティア活動を取り入れたり、学生の自主的なボランティア活動を支援するなど、学生のボランティアを推進する大学等が増えてきている。今後、教育委員会、学校と大学等との連携により、学生ボランティアを積極的に活用することが期待されるため、教育委員会や学校側には、ボランティアを受け入れ易い体制作りが望まれる。」

小学校教員への情報活用能力増進支援私案

- (1) 大学情報センターの Web ページ内に小学校教員が自由に意見や質問などを投稿できる掲示板や Wiki を設置する。その際、学内の教員または学生が必ずレスポンスする必要がある。
- (2) 情報に熟練した学生ボランティアによる小学校教員へのインターネット個人指導。集団を対象とした研修には限界があると思われる。
- (3) 学校、教育委員会、大学は定期的に会合を開いて連絡を密にする

大分大学医学部における導入教育について

大分大学 上野 徳美・岡田 忠成

本発表では、大分大学医学部の特色あるカリキュラムの1つである、医学科1年の導入教育のプログラムや授業内容を中心に報告を行った。以下は、発表の要旨である。

本学の医学部（旧大分医科大学）では、平成12（2000）年度に大幅なカリキュラム改革を行い、教養教育（一般教育）の各科目の授業を開始する前に、あるいは一部並行して「導入教育」を実施している。すなわち、入学直後の4月初旬から7月までの期間に「イントロダクトリーⅠ」（必須科目、3単位）を設け、一般教育概論、早期体験実習、健康科学概論（旧医学概論）を行っている。これらは、大学生・医学生としての基本的な心構えや医学を学ぶ者としての動機づけを高めるとともに、教養教育の意義と方向性を示すものである。昨年秋、旧大分医科大学と旧大分大学は統合され、本年4月から教養教育の体制やカリキュラムの変更が行われたが、本学医学部は導入教育の意義と重要性を鑑み、統合後もこのプログラムを継続して実施している。

一般教育概論では、大学の授業や学問に対する取り組み方、学習態度の他、医学部で行われる1年半の教養教育科目の授業などについて、各科目の教員がガイダンスとオリエンテーションを実施している。高校教育から大学教育への円滑な移行を図ることや、医学における教養教育や基礎教育の重要性、教養教育と専門教育との関連性等について概説することを目的としている。この概論を受講することで、教養・基礎教育の目的や意義について新入生の理解が深まったり、大学の授業・講義に対する不安が軽減されたりしている。

早期体験実習では、学内（附属病院）及び学外（病院や施設等）で体験実習を実施している。この実習では、病院や施設において実際にさまざまな患者と接してコミュニケーションを図り、医師や看護師、その他の医療スタッフの仕事を直接に見聞するとともに、チーム医療や各専門職間の連携の重要性を知り、将来の医師としての基本的な心構えを学ぶことなどを目的としている。この実習は、医学・医療に対する学生の動機づけを高める上でかなり効果的なものとなっている。

さらに、健康科学概論は医学科と看護学科の合同授業の形で行われている。この授業では、医療関係者に限らず、教育や宗教関係の方々にも講義をお願いしている。健康科学、医学、看護学の位置づけや健康の概念、さらに医学・医療の本質や医療者としてのあるべき姿などについて幅広い視点から学ぶことを目指している。健康科学概論も新入生の動機づけを高める上でかなり有用なものとなっている。

なお、入学後すぐに医学科と看護学科合同の新入生合宿研修も実施している。この研修は学外の宿泊施設で2日間行われるが、合宿を通して学生同士や学生と教員の交流と親睦、友人関係づくりなどを図ることを主な目的としている。また、4月末には、学生と教員が全員出席し、合宿研修、一般教育概論、早期体験実習についての反省会も行っている。

ちなみに、本学医学部専任の教養教育系教員は人文社会科学、自然科学、外国語等、計15名(外国人教師を含め)であり、医学科の8大講座に所属している。そして、医学科と看護学科の教養・基礎教育科目、全学共通科目の他に、医学科・看護学科の専門教育科目の一部、さらに大学院修士課程と博士課程の授業科目も担当している。

以上、本学医学部の教養教育に関わる導入教育の概要について述べた。発表当日は、大分大学医学部の理念や特徴、医学部医学科の教育目的、教養教育の基本姿勢、医学科の教育カリキュラム、導入教育科目の位置づけなどに触れた後、導入教育科目の具体的内容について紹介し説明した。その発表内容と資料を以下に示す。

[研究発表資料]

大分大学医学部の沿革

昭和51年(1976) 大分医科大学開学
 昭和53年(1978) 第1期生入学
 昭和56年(1981) 附属病院開院
 昭和59年(1984) 大学院医学研究科(博士課程)設置
 平成6年(1994) 看護学科設置
 平成10年(1998) 大学院看護学専攻(修士課程)設置
 開学20周年式典
 平成15年(2003) 大学院医科学専攻(修士課程)設置
 10月 旧大分大学と統合
 平成16年(2004) 国立大学法人 大分大学

大分大学医学部の理念

本学部は最新の学術を教授・研究し、高度の医学及び看護学の知識と技術並びにそれらの本義を見失わない道徳観と、それを支える豊かな教養を身につけた医療人及び研究者を育成し、もって医学及び看護学の進歩、国民健康の維持増進、さらに医療・保健を中心に地域及び国際社会の福祉に貢献する。

大分大学医学部の特徴

恵まれた学習環境
 24時間利用可能な図書館 情報処理実習室

大分県の医学・医療の中核的拠点
 附属病院 関連教育病院

国際医療協力 国際交流
 トミニカ共和国 中国 フィリピン共和国他

医学部医学科の教育目的

患者の立場を理解した全人的医療ができるよう、豊かな教養と人間性、高度の学識、生涯学習能力、国際的視野を備えた人材を育成することを目的として実践的な医学教育を行う。

医学部における教養教育の基本姿勢

幅広い知識と教養の習得とともに、専門教育への準備教育としての役割を重視している。また「知識」の習得を中心とする受動的学習よりも、能動的学習、いわゆる課題探究や問題解決能力の育成を重んじる。そして、学問や研究の面白さ、奥深さ、いわゆる「知」を楽しむ心を育てる。

さらに、将来の医療者として不可欠の人間性教育やコミュニケーション能力の育成を重視している。

医学科の教養教育の目的

医師や医学研究者に必要な幅広い知識や教養、医学の専門知識・技術を習得するための基礎学力を身につけさせるとともに、人間を全人的・総合的に理解できる幅広い見識をもった学生を育成する。

また、コミュニケーション能力や社会性・協調性、倫理観・責任感、主体的・自律的な学習態度、ならびに医学生としてのモチベーションを向上させる。

学年 学期 修学期間	1		2		3			4			5		6	
	前	後	前	後	1	2	3	1	2	3	前	後	前	後
主な 修学 段階	I		II		III			IV			V			
	全学共通科目 63単位		イントロダクトリー 1 63単位		総合カリキュラム 基礎医学 臨床基礎医学 社会医学 臨床医学 機能別・臓器別 チュートリアル教育 が中心 実習 研究産配属 73単位			イントロダクトリー 2 3 8単位			臨床実地修練 実践的臨床 クラークシップ CPC 特別講義 各種医療関連施設実習 63単位			
	↑		↑		↑			↑			↑		卒業	
	合計217単位													

科目名	1学期		2学期		開設単位数	必修科目単位数
	前	後	前	後		
全学共通科目	○	○	○	○	6	6
イントロダクトリー I (導入教育科目)	○	○			2	2
一般教育概論			○		1	1
早期体験実習			○		1	1
健康科学概論				○	1	1
外国語 I				○	1	1
外国語 II				○	1	1
身体・スポーツ科学科目				○	1	1
基礎教育科目				○	1	1
実習				○	1	1
研究産配属				○	1	1
合計	○	○	○	○	21	21

区分	授業科目	1学期		2学期		開設単位数	必修科目単位数
		前	後	前	後		
全学共通科目	全学共通科目	○	○	○	○	6	6
	イントロダクトリー I (導入教育科目)	○	○			2	2
外国語	外国語 I			○		1	1
	外国語 II			○		1	1
	外国語 III				○	1	1
	外国語 IV				○	1	1
	外国語 V				○	1	1
	外国語 VI				○	1	1
科目	身体・スポーツ科学科目				○	1	1
	基礎教育科目				○	1	1
	実習				○	1	1
	研究産配属				○	1	1
合計	○	○	○	○	21	21	

イントロダクトリー I (導入教育科目)

1. 一般教育概論 (1単位必修) 4月
2. 早期体験実習 (1単位必修) 4月
3. 健康科学概論 (1単位必修) 5月～7月

一般教育概論

大学生、医学生としての心構えや医学への動機づけの向上、各教科・専門分野の概説とオリエンテーション、専門教育との関連性の説明等を目的として、教養・基礎教育担当の教員がガイダンスを行う。

概論の授業科目：

倫理学、心理学、数学、情報科学、物理学、化学、生物学、人間生物学、英語、ドイツ語

早期体験実習

病院や施設での介護体験等の実習を行う中で、患者さんとコミュニケーションを図り、患者さんの生活の様子や状態などを理解する。

また、医師や看護師、他の医療スタッフの仕事を直接に見聞するとともに、医師の役割、チーム医療や各専門職間の連携の重要性を理解し、将来の医師としての基本的な心構えやチームワーク等について考える。

早期体験実習の施設等

1. 学内（附属病院）

内科、外科、精神神経科、小児科、産婦人科、眼科等
19の診療科のうち1科を体験。

2. 学外（病院、施設等）

別府発達医療センター、国立療養所西別府病院
別府リハビリテーションセンター、湯布院厚生年金病院
のうち1カ所を体験。10名1グループで、3日間の実習

健康科学概論

医学・医療の専門家に限らず、教育・宗教関係者による講義を通して、健康科学、医学、看護学の位置づけや健康の概念、さらに医学・医療の本質や医療者としてのあるべき姿などについて、幅広い視点から学ぶことを目指している。

（医学科と看護学科の合同授業）

健康科学概論の講義題目

講義題目の例

21世紀の医学・看護学教育
満足と安心の医療
健康科学とは何か
ライフスタイルと健康
国際医療協力から得たもの
心と健康について etc.

まとめ

導入教育科目は、教養・基礎教育や学問に対する理解と心構え、および医学・医療への動機づけを向上させる有用な科目になっている。特に、早期体験実習は体験学習・実習ということもあり、学生に与えるインパクトは大きい。

導入教育によって高まった学問・科学への関心や医学・医療への動機づけを、その後の教養・基礎教育においていかに維持・向上させるかを考えながら、各教員は学生教育と研究に取り組んでいる。

《発表：導入教育部会》

熊本大学「21世紀教養教育」と西洋史系教養科目授業実践の試み — 授業到達目標の設定とその実質化に向けて —

熊本大学 山田 雅彦

はじめに

熊本大学では、2004年度より教養教育のメニューを整理して、すべての科目が8つの「21世紀教養教育目標」に対応するようになった。特に、これまで「コアカリキュラム」と称しながら、実質的には各々の教員の専門領域に即したテーマ別授業にすぎなかった個別科目群を、その負担体系を含めて整理し直し、すべてそれらを「主題科目Ⅰ」・「主題科目Ⅱ」の名称のもとに再編した（開講数も従来の8割ほどに減らした）。また、その下位目標として教科集団別の教育目標も明示され、それらに応じて個々の授業が設けられることとなった。さらに各授業担当者は、それぞれの授業の範囲内においても、学生により具体的な「授業到達目標」を示して授業を行うことともなった。以下の報告では、まず熊本大学における今次の改革の概要を紹介し、後半の2つの章では、私自身が担当した世界史系の教養科目を例として、「授業到達目標」がどのように明示され、それらが授業全体の中でどのように検証されていったかについてささやかな事例報告を行う。そして、最後に若干の問題点や展望をもって締めくくりたい。

1. 熊本大学教養教育における教育目標の体系的表示

2004年度4月からスタートした新カリキュラムでは、8つの教養教育目標が示された。そのうちの最初の4つは以下の通りである。

- A 現代社会を理解するために必要な、社会・文化・人間に関する基本的知識の習得をはかる。
- B 現代社会を理解するために必要な、現代科学に関する基本的知識の習得をはかる。
- C 学術研究の一端にふれ、学問に対する興味や関心を高める。
- D 自分自身で問題を発見し、それを発展させる能力の育成をはかる。

このうち、AとBは、現代性・社会性がキーワードとなっている。すべての学生に現代的感覚を研ぎ澄ませて欲しいという思いから設定された21世紀型教養教育の主幹であり、これに応えるべく設定された科目群が「主題科目Ⅰ」である。次に、上記のCとD、いわば「知的好奇心」や「問題解決発展能力」をキーワードとなっている目標に対しては、同じくテーマ別の授業でも「主題科目Ⅱ」として全体が統括された。

ここではこの主題科目群に限って話を進めさせていただくが、主題科目Ⅰ・Ⅱは、20余の教科集団—これらは8つの学系をもゆるやかに構成している—によってその内容が用意されることになる。この段階において今度は、各々の教科集団レベルで、「教科集団教育目標」が検討され、それに応じて適切な授業科目が設定されることになる。熊本大学では、こうした作業を進めるに

あたって、まずは各教科集団独自の視点で目標と授業科目を作り、次にそれらを大学教育委員会及び大学教育機能開発総合研究センタースタッフがオーガナイズする、すなわち教科集団幹事等とのヒアリングを経ながら必要な変更・修正を施す、という手順をとった。従って、例えば現代社会の諸問題についての講義を展開しやすい、あるいはそれが期待される分野の教科集団に対しては、特に「主題科目Ⅰ」の増強を要請した。逆に、知的興奮の面で貢献していただくことが優先されるなら教科集団に対しては、「主題科目Ⅰ」は無理をしなくとも、「主題科目Ⅱ」において特徴的な科目を設定していただくよう求めることもあった。いずれにしても、こうしたテーマ別授業の編成は、一般に「カフェテリア方式」と称される体系に属することは間違いないものの、これらに一定の体系性を保証しようとした結果が以上の改革であった。

実は、この改革は、以上のような各教科集団レベルでの教育目標・授業科目の設定で留まっているのではない。もう一つ下のレベルで、より授業内容に即した段階＝個々の授業において、学生の達すべき「授業到達目標」が設定されて、しかもそれらが統一したフォーマットでシラバス等に銘記されるようにもなった。これは、3項程度の具体的な目標（「～できる」）をシラバスに明記したものであり、この最後の到達目標の導入においては、JABEE基準に基づく工学部の教育実践が大いに参考とされたことを付言しておきたい。

このように、一般的なレベルからより具体的なレベルへと3段階の教育目標が明示されるメリットは大きく、主なものに限ってみても次の3つを指摘することができる。第1に、各授業の内容と目標の関係が明確になり、評価基準が透明になる。すなわち、試験やレポートを通して行われる評価が、具体的な授業到達目標と連動して実施されることになる。第2に、関連して、学生は授業で何を要点にして学習するのか全体像が見えやすくなり、半期間にわたっての学習意欲の維持と向上とが期待できる。第3に、各科目の関係や教養教育・専門教育全体の中での位置付けが明確になることで、学生が自主的に科目選択を行っていくことが無理なく可能となる。以上の方法を最大限有効に活用した場合には、学生はそれぞれの教科集団や各科目の詳細な設計図を見比べて、自分自身の履修計画内になにがしかの「年間テーマ」を持つことさえ期待される。

ただし、この期待が実際のこととして実現するもしないも、また、改革に込められた潜在的なメリットを生かすも殺すも、すべては各教科集団での教育目標の設定の在り方、あるいは個々の授業担当者による授業到達目標の在り方一つにかかっている。例えば、教員本人は高尚かつ抽象的な目標を掲げて自己満足かもしれないが、学生がこれをほとんど理解できない、従って目標はどうしてもよいけど何となく授業を受けてみたというのでは困るし、また、最初からほぼ全員がとうてい到達不可能な高度な目標や授業内容であっても教育の意味がない。逆に、到達目標に比して内容があまりに簡単にすぎて、結局は全員が容易にその目標に到達できるようでも、その授業を行う意義がぼやけてくる。いずれにせよ重要な点は、シラバスに明示される授業到達目標こそが、本来は定期試験や定期レポートの課題そのものとなるべきものであるということである。これが貫徹されれば、学生は最初から試験の問題文—かなりしっかりとした論述式の問題文ということになる—を与えられていて、それを解決することを常に念頭において毎回の授業に臨むことになる。この方法には当然賛否両論があり、現在でも一部分野からの根強い反対意見は見られるものの、一応の賛同を得て熊本大学をこの方式を教養教育の現場に導入した。少なくとも、これによってほぼすべての授業に一選択的な人文社会系の授業においても—誰が見ても確認可能な

「大黒柱」が与えられるようになったことは確かであろう。今時の大学低学年次生には、こうした問題解決型の教育方法は彼らの眠っていた問題意識や社会感覚を目覚めさせる意味でもおそらく必要効果的なものではないかと考えている。

2. 歴史学教科集団の科目編成とそのうちの西洋史系科目

私自身は、20 有余の教科集団の内、学系 8「歴史と地理」の「歴史学教科集団」に属しており、さらに教科系集団という表現を仮に使えば、「西洋史系系集団」のスタッフである（他に、日本史系系集団とアジア史系系集団が存在）。

歴史学教科集団は、従来は上に述べた「系集団」がそのまま授業の科目を構成する形で、「日本の歴史」「東洋の歴史」「西洋の歴史」といったあり意味非常に分かり易い名称区分の 3 授業科目を実施してきた。むろん、それぞれテーマ別に数種の授業を含むもので、例えば「西洋の歴史 X」は西ヨーロッパの経済史の内容であったり、「西洋の歴史 A」はギリシア古代史であったりと、それぞれの授業名称の最後にアルファベット記号を付して各授業を区分してきた。この区分自体は、今後も主題別・テーマ別の授業である以上踏襲されるが、しかし、今次の改革でテーマ別系授業の大括り方法が、現代世界の諸問題へのアプローチを主たる責務とする主題科目 I と、知的好奇心を喚起することが狙いの主題科目 II の 2 系統に再編されたことで、歴史学教科集団も、従来型・伝統型の「日東西」区分による授業設定を思い切って廃止し、これまで実際に取り組んできていた全テーマ別授業の内容を吟味し、さらに新たな要素も加えて、全く別名称の 4 授業科目を設けることとなった（表 1 参照）。表 1 にあるように、主題科目 I はただ 1 つ「現代世界の形成と課題」しかないが、しかしこれでもってほぼ日東西の区分に関わらず、現代史の諸問題を広くグローバルな規模で提示するという狙いを包含している。他方で、主題科目 II は「モノが語る歴史」「地域の世界史」「日本社会の歴史」の 3 科目を設けている。この措置はこれまで実践してきた多様なテーマ学習を受け継ぎ、それらの間の微妙な性格の違いを配慮した結果であり、教員の授業負担の面でも、いずれも、「モノ」「世界の諸地域」「過去の日本」をキーワードとして、歴史事象、あるいは歴史研究のおもしろさを示すことを狙いとして日東西の垣根を越えてまとまったものである。

ただし現時点では、個々の授業テーマの設定のいっさいが体系的な教育目標・理念のみを根拠に成立したものとは言い難い。実際の所、大部分の授業は従来担当していた授業テーマの全体内での位置づけを変更しての「継承」であったり、教員の専門分野自体は大きく代えようがないためあまり無理な科目新設の要求はできなかつたりと、表 1 のようなメニューも概ね経験的にできあがった表でしかない。つまりは、個々の教員が担当可能なテーマを最初に出し、その上で教科集団幹事等による調整を経て、相応の名称で一定の統一性を保っている、といったほうが正しい事態を伝えている。それでも例えば西洋史系（構成員は非常勤も含めて 6, 7 名）のような、いわば「系集団」においては体系化への取組は十分早くから展開していたことは確かであり、個々の教員が可能なテーマを提示する段階では一定の調整は終了していた。実際、西洋史系スタッフが構想したプランについては以下にその概略を示しておきたい。

西洋史系教員の間で最低限合意されていることは、まず各々の学部等での負担量も考慮しつつも、専任スタッフ 4 名は最低 2 年に 1 度は半期の教養主題科目を担当することである（ただし、

大学教育センター所属の私のようなスタッフは別で、ほぼ年間3コマ以上の担当となる)。そして内容面では、まず各々が専門とする地域・テーマに応じて分担次のような分担を決めた。

1) 熊大世界史系スタッフ(非常勤含む)の専門領域からのテーマ設定

フランス・低地諸地方中世史(専任教員Y)、フランス近世近代史(非常勤教員)

イギリス中世史(専任教員T)、イギリス近世近代史(専任教員N)

イベリア半島地域史(非常勤教員)、アメリカ現代史(専任教員S)

2) 熊大スタッフが補完しあって別途提供しうるテーマの設定

主題Ⅰ: 環境と人間の歴史(環境史の入門概説系) これはアジア史系教員とも連携可

主題Ⅱ: 集落と市場の語る西欧の歴史(都市・市場史の入門系)

主題Ⅲ: 歴史における伝承と記録(文書研究・史料論の入門系)

主題Ⅳ: 経済システムから見たヨーロッパ史(社会経済史の入門概説系)

2004年度は以上のメニューから6テーマが提供されたが、おそらく今後も教員数の大きな変化がないことを前提に、しばらくはその数で推移することになろう。諸テーマを今後どのように充実させ、何よりもうまく回転・連携させていくかなど、今後詳細をつめねばならない点も多々残されているが、うまくすれば私は相応に有機的なメニューを学生に提供できるものと考えている。ちなみに、以上の主題科目とは別に、私自身は、所属する大学教育センター責任のコマとして、文学部の文学系教員、法学部の法制史の教員とも連携しあって、学際科目「歴史のなかのユダヤ人」をもオーガナイズしている。これは歴史学教科集団の管轄する科目ではないが、私自身は常にこの科目を歴史の補助的科目の1つとして運営したいと考えている。

3. 実践例ー「地域の世界史G」(主題科目Ⅳ)の場合から

以上の「制度的準備」を経て、2004年4月より新体制の実施がスタートし、私自身もいくつかの授業を前期、さらに後期と受け持った。そのうち、前期に新1年次生を対象に一すなわち新カリキュラムの授業として一担当した主題科目Ⅳ「地域の世界史G(経済システムから見たヨーロッパ史)」について、その授業実践の結果を簡単に振り返ってみたい。

第1回目の授業は、しばしば「イントロダクション」などと呼ばれて、簡単に概要を述べて切り上げる時間などと言われることが多々あるが、実際には選択系科目のすべてにとっては第1回の講義ほど重要なものはない。とりわけ西洋史など外国の歴史を始めるに際して必ず説明しなくてはならない重要ポイントは、「外国の」しかも「歴史」などという、普段の学生生活や社会生活におよそ「縁のなさそうな」科目を、いかに自然な感覚のままに、いかに興味深く受講できるように誘導するかである。ここで説明のポイントとなる、いやきちんと説明をする必要があるのがシラバスに明記された3つの授業到達目標である。私の「地域の世界史G」の授業到達目標は以下の3つであった。

1) ヨーロッパが古くから1つの経済的有機体であったことを理解できる。

2) ヨーロッパの中世から近世・近代にかけての経済史の諸問題に関心をもつことができる。

3) ヨーロッパの諸国家が早くから世界に進出していったその背景を説明できる。

第1回目の授業で私は、授業の構成とともに以上の授業到達目標とその意義に関して、具体的な話を織り込みながら説明を行った。3つの目標はいずれもかなり学術的に設定したものであり、

最初は私自身も果たしてこれが1年次生に向けに有意義かどうか心配していたが、時間を費やして説明した結果、学生もある程度の準備をして授業に臨む気持ちが出来たようであった。2回目以降のリタイア者はほとんどいなかった。それどころか、今年の場合は2週目、3週目と受講者数は増えて、当初50～60名ぐらいであった受講者数が最終的には旧カリ学生も含めて80名有るまで増加した。これは授業の最初の段階で、その授業が何をどこまでどのように明らかにしようとしているのかまず示すことが、いかに重要であるかを暗示しているように思われる。もっとも、歴史学の現代性などといって抽象的な話を最初から展開することだけは禁物である。以前の経験からやや反省的な半紙になるが、これはむしろ逆効果であって、学生にあまりこの手の話をするとならば彼らは「引く」ものである。学生の身になって考えればすぐに気がつくことだが、学生は「この授業は大変すぎる」と感じてしまうのである。高校までの「世界史」科目はこのところ大変な不人気科目になってきている現状にあって、大学関係者としては、学生に歴史学の世界を再認識させることは重要だが、あまり声高に世界史の必要性など叫んでも空振るのがオチであることをきっぱりと認識すべきであろう。

2回目以降の授業は、毎回資料付きの比較的詳細なレジュメを配布しながら、ほぼシラバスの通りに進化した。レジュメ配布は以前より行っていた方式であったが、本年度からは毎回の授業の始まりに際して、その時間の授業ポイントについて、「問題提起」と称して簡単なポイント提示を行い、同時に授業最後の若干の時間を使っての（時間のない場合には授業後の時間を使っての）ミニメモレスポンスカードの提出を学生に求めた。レスポンスカードのいくつかは、文字通り質問をぶつけてくるものもあって、担当者としては当然これらに答える必要もあって、毎回授業開始とともにまずはこれらレスポンスカードを使って前回授業の復習を行い、さらに一部の発展的内容のレスポンスを紹介して当日の授業内容に移行していく、その際に当日の授業のポイントを示すという方法をできるだけとった。こうした方法をとると授業自体の時間は当然ことながら短くなっていく。実施的な講義時間は正味65～75分ぐらいかと思われる。詳細なレジュメを用意したことで、大半の学生が内容的には十分ついてきていたことは、種々のレポートやアンケートから確実ではあったが、結果として授業内容の提示しおのものはやや急ぎすぎた感は否めない（今後、授業内容自体の精選、あるいはレジュメの配布がもたらす効果のプラスマイナスについての本格的な検討が必要である。ちなみに2004年度後期の私は、以上の反省からレジュメをほとんど無くして目次程度のものしか配布せず、ややゆっくり目に授業をして行っている。現在目に見えて確実なことは、これによって学生自身が「書く」訓練をおおいに行っていることである）。

さて、今年の授業のもう一つの実践ポイントは、授業到達目標を果たしてどのようにチェックしていくか、その方法にあった。上に示したように私の設けた到達目標は、なお抽象的な表現とはなっているが—その点は反省せねばならないが—、全体の内容を踏まえ、それらを昇華して身に付くような経済史の方法論といった、専門学生に要求されるレベルのものではないことは言うまでもない。むしろ全体の内容を3分割して、ここでは第1目標が古代史部分、第2目標が中近世史部分、そして最後の第3目標が近世・近代史域に関わる主題となっているにすぎない。この点は第1回目の授業でも伝えていた点で、どれか最低2つの目標は実現して欲しい、つまり2時代のうち2時代以上に興味と関心を持ってくれというメッセージであった。こうした目標のチェ

ックは従って3期に分けての定期レポートによる評価となった。

まず第1回目のレポートは、ちょうどローマ帝国の経済の話を終えた連休前最後の時間に、古代ローマ帝国の性質や終焉に関する小論文を課し、学生には連休後に提出させた。これは共通テーマについて各自がそれまでの配布資料等を用いて授業をとりまとめるといった内容でもあって、一種の小テスト、初期段階での理解度偏差のチェックテストという側面もあった。全レポートとも、5月半ばに学生が各自都合のいい時間に研究室まで顔を出させて、コメントをそれぞれ付して一また返却時には口答で一返却を行った。レポートの書き方を含めてのこの個別説明付き返却は好評であることに違いなく、その後もこの授業の基本となった。

2回目のレポートは、5月下旬に課題を提示し、約1月後の6月下旬に提出するというやり方をとった。今回は、前回と違ってまったくの自由論題による長文レポートとしたが、これは授業内容の中世から近世にかけての様々な事象に関して学生自身に興味あるテーマを選別して深めてほしいという第2の到達目標に即した結果である。自由論題だけあってさすがにこの採点にはかなりの時間を要したが、最終的には最後の8月はじめの補講時間をそのまま使って、コメント・解説付きでまとめて返却した。その際、ここのレポートに朱を入れてコメントを付しただけでなく、今度は「採点基準と総評」をB4 1枚のペーパーにまとめて配布した。採点基準とレポート内容の主題別分類とそれぞれについてのコメント一覧（評価点も含めて）、さらに全体を見ての印象等をまとめたものである。このようなペーパーを1つの授業時間を使って配布したのは、自由論題であったことから学生全員がどのような点に興味を持ったか、また自由論題ではどのようにして点差がつくのか、学生自身が的確に知るべき、理解すべきであると考えたからである。また、厳密で一貫性のある評価を実現するためには、まずは学生に対して説明できる評価基準を自分自身で持つことからしか始まらない。いずれにしても、最後の本来ならば定期試験の時間を使ってレポートを集団返却することは、重要な「おさらい」の時間となったと確信している。

3回目のレポートは、7月はじめに授業時に提示していた、これまた第1回目同様の共通課題の小論文提出（第3番目の到達目標に呼応したイギリスの産業革命に関わる内容）であり、これは一切の定期試験が終わる8月のはじめを締め切りとした（ちなみにこれはすべてを返却し終わってはいない）。

評価判定は、以上の3つのレポートと普段からのレスポンスカードによる授業貢献を総合的に判断して行った。80点以上の「優」は全体の3割弱しかいなかった。ただし2回以上きちんとしたレポートを提出した学生は、概ね70点以上の「良」の評価にはなっている。

このように一応の成果点のみ述べてきたが、問題がなかったわけではない。これは授業アンケートの自由記述の欄である学生が指摘したことだが、やはり自室的な講義時間が短くなってしかもレジュメにほぼすべての情報を盛り込みすぎたことで、明らかに授業内容が単調になって、一部の学生の眠気を誘っていたことである。「はまるとおもしろいのですが、眠たくなったらもうたならなく眠たくなる」というのは頭の痛い、しかしウーンとうならざるをえない私の授業の改善点である（これを受けて後期の授業で大幅な改善を行いつつある）。また、3回にも渡ってかなり長大なレポートを課したことは学生にもまた私自身にもかなりの負担となったことは否めない。3回もレポートを出して、結局「良」、場合によっては「可」しかとれなかった学生にとっては、非常にコストパフォーマンスの悪い授業ということになるであろう（内容は伝えている

が・・・)。この点も適正な課題を持続的に提供していくノウハウを今少し明確な形で固めていく必要があるが、この問題こそは実は授業間での連携、あるいは科目種別毎の一体的実施など、これまでの授業主体者任せの方法からの脱却が必要となっているようにも思われる。

おわりに―「選択科目」を選択するモチベーションの向上をどうはかるか

以上述べてきたことをいくぶん一般化すると、教養教育の授業をこのように「主題科目」カフェテリア方式で行う場合、まずはその長所短所を理解した上で、長所部分を可能な限り拡大していくよう努めねばならない。もともとカフェテリア方式である以上、学生たちは得てして「おいしい」科目の選択に流れがちな科目である。そうした学生の行動パターンに対して一定のブレーキをかけ、意味のある選択行動を促すためには、何にもましてまずはここの授業テーマが魅力的なものでなくてはならない。毎回の授業でのアクセント付けや学生へのフィードバック等は今や不通の取組となっている。また、評価方法も定期試験だけに頼らない多様な手段が授業の本来の目的・趣旨にあわせて積極的に導入されるべきである。評価基準の説明をかねての復習（おさらい）時間の確保なども大いに図れてよい試みと考える。

最もそれらの課題は直ちに個人の取組如何を越えて、組織としての対応という問題へと行き当たる。個々の授業内容自体の質が担保されようとも、授業相互の間に何らかの繋がりや最低限の共通した枠組みが無ければ、結局の所大学の授業は旧態依然たる先生たちの自己主張の場でしかないことになる。緩やかでよいので授業科目間に樹形図なり系統図を描き、場合によっては履修モデルの提示をしていくことも考えねばならない（これは現在熊本大学では一部の教科集団や学部で検討中である。教科集団は提供メニューとして、学部は学生の受講・履修のメニューとして）。むろん、専門科目との繋がり、あるいはそれとの一体的なカリキュラムのなどが考えられるべきであるが、この点は差し迫りつつも、なお今後ロードマップを必要とする課題であるというしかない。いずれにせよ、既に私自身の実践例でも述べたように、授業間での連携、あるいは科目種別毎の一体的実施など、これまでの授業主体者任せの方法からの脱却が必要となっているようにも思われる。つまりは、この授科目種別ならレジュメは配らない、パワーポイントも使わない、代わって学生に自分でメモをとらせる、あるいはこの授業群ではどの授業テーマでもレポートを必ず2回は課す等、こうした全体的なカリキュラム調整が今後大学教育のこまめな実施に際しては必須の課題となってこよう。意味ある形の課題と評価方法の採用が求められているからである。その点では今後、まずは相応に機能している教科集団にあっては、教科集団、あるいはその亜集団レベルで、科目内容については随時互いのシラバスをチェックする、さらには各々の授業テーマの3つの授業到達目標を相互に理解しあって、全体で構成する、といった、教科集団単位の科目編成会議がもっと開かれていかねばならない。そうした取組こそは、有名大学人を招いての大きかりなFD研究会以上に意味のある、いわば本来のFD＝ファカルティ・ディヴェロップメント活動を意味するのではなかろうか（講演会や授業パフォーマンス型のFDから、現場末端教育単位での恒常的な授業づくりを中心とする会議へ）。組織全体の能力資質向上に向けたこうしたシステムづくりが、新たにスタートした熊本大学21世紀教養教育の新カリキュラムの行方を左右しているのである―ちなみに、後期10月29日の午後、学園祭の準備日の休講時間帯を使って、はじめて教科集団単位でのFD分科会がこの度開催されたことを最後に付言しておきたい。

表 1

歴史学

科目区分	主題科目 I	主題科目 II	主題科目 II
授業科目	現代世界の形成と課題	モノが語る歴史	地域の世界史
教育目標	現代社会の形成過程を歴史的に把握する能力を身につけさせ、現代社会が抱える諸矛盾の原因について深く考えられる視野を持たせる。	生き生きとした人間の「生活」に焦点を当て、過去から未来への人類の歩みに興味を持たせる。	長期的・複眼的視点に立つことで、「国家」と「地域」とを多様な視点から考えさせる。
授業 テーマ	A(アメリカ経済の展開と世界) B(中国現代史) C(核兵器と人類) D(ヨーロッパ近現代史入門) E(環境と人間の歴史)	A(遺物が語る衣食住の歴史) B(木簡が語る日本の古代) C(地名が語る地域の歴史) D(漁業から見た日本の歴史) E(人類史の起源) F(集落と市場が語る西欧の歴史) G(歴史における伝承と記録)	A(イベリア世界の歴史) B(中世ヨーロッパの社会と人々) C(フランスとドイツの間を考える) D(大英帝国の歴史) E(中国前近代社会史) F(上海史) G(経済システムから見たヨーロッパ史)

科目区分	主題科目 II
授業科目	日本社会の歴史
教育目標	「日本」「日本人」という存在の「歴史性」を相対化し、現代の日本人に求められている国際的視野に幅と深みを持たせる。
授業 テーマ	A(織田信長に見る「中世」と「近世」) B(近代中国の日本認識) C(戦国の村・戦場の村) D(地方から見た日本近代史)

網掛けは2004年度に開講された
授業テーマ

導入教育部会の報告

日本文理大学 津田 克巳

各大学における「導入教育」の取り組みについて第1日に4編、第2日に2編、合計6編の発表が行われた。「導入教育」という語の理解に関しては大学毎に特色が感じ取られ、全体に多彩な発表となった。また、各発表に続く質疑応答では所定の時間枠をフルに使っての活発で熱心な議論がなされ、この問題に対する一般の関心の高さを窺わせた。各発表の概要は次のようである。

1. 「初年次における少人数教育の成果と課題」 大分大学 市原宏一

大分大学経済学部の「基礎演習」(少人数教育・1年次前期必修)は、授業内容は教官ごとに異なるが、入門書の購読などを通じて新入生に一般的、基礎的な教養をつけさせることを目的とする。近年は学生間の学力格差が大きいため、それぞれの学生のレベルに即した少人数教育を行わねばならず、それに対応してより効果的な教授法の検討と実践とが必要となる。「基礎演習」では、まず、最初の4回の授業内容の標準化を行って教員用指導要綱と学生用資料とを作成し、そのうち3回を占める情報リテラシーは演習室での合同授業とした。2004年度からは新入生ガイダンスを「基礎演習」を単位として行っている。また、2003年度には「初年度のゼミナールにおける教育方法の改善ワークショップ」を開催し、少人数教育の方法の改善を試みた。さらに2005年度には学部のカリキュラムの改定が見込まれるので、導入期教育の柱たる「基礎演習」の必修単位増加を図るため、その内容と教授方法との改善の継続的検討を目指して「経済学部における導入期教育としての初年次少人数教育のあり方の比較検討と開発」を実施している。

2. 「学生の小レポートによって展開する講義—『水の文学誌』の場合—」 熊本大学 森 正人

熊本大学における教養教育科目「日本の文学」の講義では、教員による一方的な説明の単調さを回避するために、授業時間中に10～20分間程度の時間で書く、小レポートを提出させている。担当教員はレポートを添削し、簡単なコメントを付して次週に返却する。同時に幾つかのレポートを選んで学生に紹介し、解説を加える。この方法によって教員は受講生の授業理解度を把握し、彼らの授業への関心を確保し、問題意識を喚起することができる一方、受講生は講義内容の理解を深め、関心を広げるとともに、他の受講生の問題意識や考えを知ることができる。平成15年度後期に行った「水の文学誌」をテーマとする授業においては道成寺の縁起物語を材料にし、提出されたレポートの内容に基づいて関連教材を作成して、授業を新たな方向に展開させて行った。

3. 「日本文理大学の導入教育改革」 日本文理大学 脇田淳一

日本文理大学では平成15年度より導入教育の改革が始まっている。専門教育科目、一般教養科目とともにカリキュラムを構成する総合基礎科目の中に新たに数学、物理、国語、英語、情報の5科目についてベーシック科目を設定し、習熟度別授業を開始した。1クラスあたり30人以下の

少人数教育である。授業では場合によっては中学校レベルにまで下がって基礎的な段階を復習する。同時に正規の授業を補完するものとして「基礎学力支援センター」を学内に創設し、主として上記科目の補習授業を行っている。これらはいずれも近年多い、中学・高校の学習内容を十分に理解しないまま入学して来る学生を対象とした、大学教育への導入の手立てである。基本的なコンセプトは“立ち止まることを恐れるな（わかるまで立ち止まろう）”ということである。

4. 「インターネット時代の初等教育について」 九州産業大学 梅野高司

すべての公立小中高等学校へのインターネット接続はほぼ達成されたが、教育の実質的な情報化にはまだほど遠い。9割の学校に学校アドレスがあっても、全教員へのアドレス付与率は1割程度、小中学校のホームページ開設率は54%程度、小学校のホームページの更新回数は7割が年間7回以下である。一方では、日本では、4軒に1軒がブロードバンドを利用している。学校はメディアリテラシーとして膨大な情報を批判的に処理し、他とのコミュニケーションを行う能力を育成する必要がある。それにはまず教員の情報活用能力を高めることが求められる。

5. 「大分大学医学部における導入教育において」 大分大学 上野徳美・岡田忠成

大分大学医学部では、将来、医学・医療に携わる新生が基本的な心構えを学び動機付けを高めるように、4月～7月に「イントロダクトリーⅠ」（必須科目・3単位）という科目名の導入教育を実施している。一般教育概論（教養教育科目のガイダンス及び各講義に対する取り組みの説明）、学内外の病院等での早期体験学習（医療スタッフの活動の見学及び患者とのコミュニケーション体験）、健康科学概論（健康の概念から医療の本質など幅広いテーマ）から構成される。さらに、学外の研修施設で2日間の合宿研修も行う。入学直後の1カ月の集約的導入教育は、高校教育から大学教育への円滑な移行を可能にする。特に早期体験学習の効果は高い。ただし4月の「イントロダクトリーⅠ」が大学全体の教養科目の開講時期と重なる不都合が残る。また、高校の生物未履修者については自発的補習を奨励するが、単位認定する補習科目は設定していない。

6. 「世界史系教養科目の教育と授業到達目標ー熊本大学の「21世紀教養教育」の考え方にもとづく授業実践の試みー」 熊本大学 山田雅彦

熊本大学では、「21世紀熊本大学教養教育プログラム」を発足させ、大きな改編を行った。コア科目を主題科目のⅠ、Ⅱに再編し、体系性を目指したカフェテリア方式を導入した。さらに、2004年度よりすべての科目を8つの「21世紀教養教育目標」に対応させ、教科集団単位では「教科集団教育目標」、授業ごとの「授業到達目標」と、3段階の教育目標がシラバス等に明記されるようになった。授業の全体像を見やすくし、半年間の学習意欲の維持と向上をはかる目的がある。教科集団が中心となって、地域とテーマによる教員間での分担体制を作り、負担を考慮しつつ、専門を補完しあって内容が設定された。学際科目も開設できるし、将来的には専門科目も含めての学部間協調を構想している。教科集団の設定によって、教官は、内容的に有機的連関のある教養教育プログラムを作りやすくなった。